

校内別室指導支援員を利用した取組について

不登校児童・生徒の状況

本校の全校児童数の約5%が、不登校もしくは今後不登校になり得る傾向にある。

具体的な取組

登校渋りがある児童が頑張っただけで登校したが、教室に入ることができなかった。校内で指定した別室で、校内別室指導支援員が国語や算数など個別に学習支援を行うなどの対応をした。また、タブレット型端末を使って教室とオンラインでつなぎ、担任の授業を見ながら学習指導を行った。

気持ちが落ち着かず、授業の進行に影響を与える児童には、校内別室指導支援員が個別に対応し、授業に集中するような言葉掛けを行った。別室も利用し、気持ちが落ち着くまで話を聞いたり、学習支援を行ったりすることで、教室での授業参加ができるようにした。

学習に対して不適応となりそうな児童に対して、校内別室指導支援員が授業中に寄り添い、支援を行った。時には、校内で指定した別室に移動し、児童の気持ちを聞き取ったり、本を読んであげたりすることで、学習意欲を引き出した。当該児童は、その後、教室に戻って学習に取り組むことができた。

学習の遅滞や人間関係等を理由に教室に入れない児童には、校内別室指導支援員と一緒に、指定している別室に移動し、悩み事を聞きとるようにした。児童に教室に入れない理由をじっくり聞き、気持ちに寄り添うようにした。



成果

校内別室指導支援員の人数を増やしたことにより、児童の様々な状況に、個別に対応することができた。個別の対応をお願いすることで、児童は心を落ち着かせて学習に取り組むことができ、教員の負担も減らすことができた。

課題

日によって児童の出席状況が異なるため、校内別室指導支援員の仕事量が変わることがある。

サポートルーム「まつ葉の杜」について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学 1 年生であり、小学校 6 年生の時から不登校状態が継続していた。不登校の要因は、本人からの聞き取りによると、「登校することの意味や価値が見いだせない」ことである。今年度より、本校に開設した校内別室サポートルーム「まつ葉の杜」で対応を行った。

具体的な取組

「まつ葉の杜」は、教室への登校が困難な生徒に対し、不登校にならないよう校内での居場所を確保し、早期の教室復帰を目指すことを目的で開設した。「まつ葉の杜」の由来は、本校の校庭に松林（「まつ」ばやし）があることと、生徒の変容を「待つ」という思いからである。数名が定期的に利用している。

担任、学年の教員、別室指導員だけでなく、家庭と子供の支援員やスクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー等のいずれかが常駐しており、学習の支援や相談などを行っている。対応した内容や様子などは、記録をとり、校内支援委員会で報告して全教職員で共有し、チームで支援を行っている。

担任、校内別室指導支援員、本人、保護者による面談を、スクールカウンセラーを交えて数回行い、6月下旬より本人と保護者両方の意思で校内別室の利用を開始した。まつ葉の杜に登校後は、連続して登校できるようになり、校内別室指導支援員等と信頼関係を築き、一緒に数学のワークや英語のワークなどに熱心に取り組んでいる。

7月になると、主に担任の働きかけにより、好きな教科を教室で一日 1～2 時間受けられるようになった。今後は、本人に教室復帰の意思があるので、チームとしての支援を継続していき、当該生徒の様子をよく観察し、無理のない教室復帰を目指す。



成果

- ・これまで登校しぶり等で、登校できていなかった生徒 11 名が活用し、登校のきっかけとなっている。
- ・別室支援員以外にも様々な方が常駐していることで、学習の支援や生徒が相談しやすい環境が整ってきている。

課題

- ・利用生徒が増加した際の対応について（学習する場所・対応する人材）
- ・利用生徒の退室時期の状況判断

生徒別室支援について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、1学期から学級の様子が落ち着かなかつたり、実技教科の時など授業中に本人が苦手な生徒と関わる内容であると、授業に遅れたり、途中で教室を出てしまい、早退することや欠席することも多かった。2学期になると家族との約束があり、欠席をせずに登校している姿が多く見られるようになった。しかし、本人はつらい思いを抱えながら学校生活を送っているようだ。

具体的な取組

生徒が授業に不応適を起こし教室を出てしまったときや、授業に出られないときは、別室支援員やスクールアシスタントティーチャーにずっと寄り添ってもらい、校内別室でクールダウンをするようにしている。

支援員は、一時的に別室を利用する生徒に対して親身になって話を聞いたり、ゲームなどをしてリラックスできるようにしたりしている。早退するときは校門まで送っていき、明日の予定を確認して下校させるなど、利用生徒の登校意欲が湧くような支援をしている。

支援員は、昇降口で登校の見守りをするすることで、生徒が支援員に声を掛け、別室を利用しやすいようにしている。校内別室に利用生徒がいないときは、教室を巡回し学習支援をすることで、不登校の未然防止に努めている。また、休み時間も生徒と談笑して距離を近く保とうとしている。

学習に不応適を起こし、授業への参加ができなくなった生徒に対して、支援員が別室で当該生徒の学習をサポートしたり、気持ちを整えるための会話をしたりしている。



成果

本人のその時の心の状態に応じて、支援の方法を選択できるようになってきた。もちろん支援員の方々とつながりがあることが成功している要因である。

課題

個別対応はできつつあるが、集団の中での対応はまだまだ支援が生かされていない。

不登校生徒の学校復帰について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、小学校時に不登校で、中学校に進学すると同時に環境を変えるため他県への転校を選択した。しかし、不登校の状況は変わらず、第1学年の9月に戻り、本校に転入した。本校においても引き続き、不登校の状況が継続していたが、以下の取組により第2学年の1学期より、別室に登校することができるようになった。

具体的な取組

学級担任及び家庭と子供の支援員が中心となり、当該生徒の現状について情報共有を行い、個別支援カルテに基づき、校内支援委員会において対応についてのアセスメントを行った。

アセスメントにより、別室登校を促すこととなり、学級担任と家庭と子供の支援員が連携し、当該生徒に校内別室支援員についての説明を丁寧に行い、登校を促し、家庭と子供の支援員が登校を支援した。

最初は、体験として1時間だけの登校だったが、校内別室支援員の学習支援やコミュニケーションにより、当該生徒の登校意欲が増し、終日、別室で生活することができるようになった。

スクールカウンセラーや家庭と子供の支援員とも情報交換を行い、校内別室支援員との情報共有により、不登校生徒の受け入れについて十分な体制を整えることで、本人の心理的不安の解消に取り組んだ。その結果、現在は、週3回程度の登校を果たした。



成果

不登校となって、他県への転入を試みてまで登校復帰を目指したが、そこでも登校できなかった生徒が、校内に別室があることと、校内別室支援員の支援により登校が続き、現在では、週3日登校できるようになった。

課題

本件に関する課題は見当たらない。これまで、登校できなかった生徒が週3日程度登校できたことは、大きな成果である。